戦後の生の重み

対談

つげ忠男
権藤晋

ただ、なんとなく……

権藤 つげさんとは余り話す必要がないんじゃないかと思っているんですけれども……。

月並みな質問ですが、マンガを画きだしたのはいつ頃ですか？

つげ いつ頃からなんでしょうね。若木書房や三洋社でポチポチ画いていたことがあるんですが、あれは無理に買ってもらった感じでしたね。全然絵が画けなかったから売れるようなものじゃなかったんですけど。

権藤 若木や三洋社の頃というと、昭和三十四、五年ですね。じゃあ、まだ十代だったでしょう。

つげ ええ、十七、八ぐらいです。若木で画いたのは、それよりもっと前ですね。あの頃画いたもので手に残っているのは全然ないんです。

権藤 どんなものがありましたっけ。「道化師」とか「ある影像」とか……。

つげ 「身体のなくなる話」なんていうのもありましたね。

権藤 話はおぼえていますか？

つげ 大体おぼえています。

権藤 スリラーものが多かったように思いますが。

つげ ええ、あの頃はスリラーもの全盛でね。そのあと時代もの全盛で、じゃあ時代ものも画かなくちゃと思って、三洋社では時代もの画いたんです。

権藤 なぜマンガを画いていたんですか？ 金になるからだったんでしょうか？

つげ そんな感じがするんですけど、余り思い出せないですね。

権藤 画いていて何を考えていたんでしょうか？

つげ なんですかね、何もなかったですね。ほかにすることもなかったし、ただなんとなく喫茶店ばかり行っていました。毎晩、友達とつまらない話ばかりして。

権藤 すると、その頃はマンガ家になろうとは思っていなかったんですか？

つげ 全然考えなかったですね。先々、マンガを画くかどうか自分でも見当がつきませんでしたね。

権藤 当時の「迷路」なんか見ると〝短篇作家の鬼才つげ忠男〟なんてキャッチフレーズが出ていますよ。

つげ ああそうですか。それ兄貴が書いたんじゃないですか。「迷路」の編集を兄貴がやっていたから。

権藤 でも、ほかの作家のと比べると、違いますよね。

つげ 自分ではさっぱりわからないけれども。

権藤 「ある影像」なんか、いま見てもいい作品だと、ぼくは思いますけど。ほかのスリラーものは、単に怖さだけしかありませんけど、「ある影像」には、生き死にの重さみたいなものが感じられるんです。つげさんは、あの作品を画きながら何を思っていたんだろうと想像したりしたんです。

つげ あれは好きな作品ですね。自分でも、うまいストーリーができたと思って兄貴に見せたんです。そしたら、二回ほど見て、「アアそうか」といったので、あとは聞かなかったんですけども。

権藤 わずか八頁の短篇ですけど、内面心理を画いたマンガでしょう。そういう意味では難解なものだと思うんです。でも、見てわかってしまった読者は、見なければよかったと思ったんじゃないかと思うんです。あるいは、貸本屋に来る読者は、そう思うことによって、自からを支えていたんではないかとも想像するんです。

つげ ただ……実際あういう作品だったから、俺の作品がポコッとでても、読者にしてみれば、「何だこれ」ぐらいだったと思うんですがね。

権藤 その頃、劇画についてはどう思っていましたか？

つげ 当時、「影」なんかの劇画が関西から押し寄せてきたんですが、すごく魅力がありましたね。

権藤 でも当初は、やはり手塚治虫あたりからですか？

つげ そうですね。

権藤 で、その後、マンガをやめて勤めたんですか？

つげ ええ、勤めたのは中学出てすぐなんですが、それからマンガ画いて、やめて再び勤めたんです。

権藤 どうして一度マンガをやめてしまったんですか？

つげ やはり画けないな、駄目だな、なんて思っていましたね。

権藤 そうすると、一昨年画いた「虫」（東考社刊）までは、しばらく画いていなかったわけですね。

つげ ええ、家ではコツコツ画いていたんですけど。「ガロ」に投稿しようと思って。

権藤 その間、何をしていたんですか？

つげ 文学に凝っていて、友だちとガリ版刷りの同人雑誌みたいなものをつくったり……。大江健三郎や開高健が好きだったですね。それで小説でも書こうと思ってたんです。同人雑誌といっても、み

んな気まぐれだったから0号にはじまって1号で終っちゃったりして（笑）

権藤　マンガにはもう魅力を感じていなかったんですか？

つげ　マンガは忘れていたみたいですね。

権藤　すると「虫」は、どんな動機で画きたしたんですか？

つげ　結婚したあとで、たいくつしていたので、そういっちゃ悪いんですが。でも画いて、やはりいいなと思いました。

権藤　続けてどんどん画いてみようとも思わなかったんですか？

つげ　べつにそうも思わなかったですね。

権藤　話を聞いていると、作品を是非発表したいという強い気持がなかったように思われるんですが……。

つげ　小説みたいなものを友だちと書いていて、いつごろからマンガにもどっていってしまったのか、正直のところわからないんです。なんとなく、なんとなくという気分か強いみたいで……。

権藤　でも、その頃と今とではまた気分的に多少違ってきているんでしょう。

つげ　そうですね。今はおもしろいですね。自分の好きなものが画けて、何ものにも規制されないから。

権藤　「ガロ」が出ていなかったら？

つげ　画かなかったでしょうね。画こうという気も起らなかったかもしれませんね。「ガロ」が出てとてもよかったと思います。

小説をマンガで表現

権藤　「ガロ」に発表した第一作は、「丘の上でヴィンセント・ヴァン・ゴッホは」でしたが、あれは以前から画こうと思っていたものなんですか？

つげ　最初小説にしようと思っていたんです。ゴッホのことを調べて、一応文章にまとめてあったんですが、これをマンガにしたらおもしろいなと思って、画いてみたんです。いずれにしても画きたいものだったので……。

権藤　文章の場合とマンガとでは同じですか？

つげ　すごく変っていますね。

権藤　文章にするのと、マンガにするのとでは、つげさんにとって変りがありますか？

つげ　違いはあまり出てこないですね。

権藤　最初あの作品を見て、小説的だなあと強く感じたんですよね。それから、〝最後の作品〟という感じがして、ある戦慄感をおぼえたんです。ここまで画いてしまって、そのあと画くものがあるのか、とね。ストーリーがいくつもあったとしても、画けるものなんだろうか、と。

つげ　あの作品は、とにかくコツコツと画いてみたいな、とそういうものでしたね。「ガロ」に投稿して掲載してもらわなくても、それでいいと……。

会社に勤めていたんですが、毎日会社から帰ってくると少しずつ仕上げていったんです。変な気持でしたね。

権藤　あそこに登場する少年は別に深刻がってるわけでもないし、ユーモラスな場面だってあるわけですよね。でも、それがかえって重苦しい印象を与えるんです。ラストで少年がタバコに火を点けるでしょう。静かすぎるんです。虚しさが広がっていくようで……。

ゴッホをおいかけながら、自己を語りつくしてしまった感じがしてね。すべてが出されてしまったみたいで、だから、〝最後の作品〟というような印象が……。

つげ　学校の先生をやっている友人が、「やけにわびしい作品を画いたな」といったけど、そういわれてうれしかったですね。

権藤　「ゴッホ」のあと画かれた作品は、少し傾向が違ってきますね。掲載されなくてもいい、とにかく画こうと思って画いた作品と依頼されて画いたのとは多少違ってくるんでしょうか？

つげ　やはり違いますね。今まで「ガロ」には6作しか発表していませんけれど、自分で印象に残っているのは、「ゴッホ」と次に画いた「懐しのメロディ」ですね。「懐しのメロディ」みたいなものをもう一度画いてみたいと思います。

権藤　「ゴッホ」を見て、次の作品に危惧を抱いていたんですが、「懐しのメロディ」というイメージ浮かべたんです。そうしたら、その通りだったので、ものすごくうれしかったですね。

「ゴッホ」と「懐しのメロディ」とは、内容が違うわけですけれども、次に「懐しのメロディ」がくるということが、よくわかるような気がするんです。

つげ　「懐しのメロディ」は画きたいと思って画いたものですね。実際は、画いているうちに変ってきてしまいましたけど。

〝京成サブ〟は実際に見たことないし、名前だけは聞いていたんで……。

戦争体験と戦後体験

権藤　この作品みて、ぼくがとくに感じたのは、つげさんにとって戦後とは何だったんだろうということなんですよ。「懐しのメロディ」のあと「青岸良吉の敗走」「昭和ご詠歌」と続くわけでしょう。それらを見ていて戦後というか、敗戦直後というか、その意味を感じざるを得ないんです。つげさんの口からじかに聞く必要はまったくないんですけれども……。

つげ　やはり小学校一、二年生の頃見聞きしたことは忘れられないですね。その頃のことが一番思い出されるんですよね。

権藤　ぼくなんかでもそうですね。戦後の混乱と廃虚を背景にした事柄が強く残っているんです。だからといって、「懐しのメロディ」にしても「青岸良吉の敗走」にしても単なる感傷的な思い出話ではないですね。ぼくには、耐えがたい現在に耐えるというのともちょっと違う、なんていうか、現在をじいっと生きてるという感じを受けるんです。

戦中派と思われる中年男の姿なんか、あまりにリアルすぎて、凄味が感じられるんです。

つげ　少年は、当時小学校一、二年ぐらいですね。中年男は今四十五前後でしょうね。彼らが何をどういう風に受けとっているか画いてみたかったですね。「懐しのメロディ」では、少年や中年男が京成サブをどうみているのか、そして、そのくい違いを画いてみたかったんです。

少年と中年男を出して、お互いに話をさせるはずだったんですけれど、画いていくうちに話すことがなくなってしまったんですよね。

権藤　はあ。つげさん自身、中年男の気持ちがわかりすぎてしまっているんじゃないかと思うんですよ。作品見ていて、つげさん自身が中年男の心情にズブズブ入り込んでいってしまっている感じを受けますね。だから、中年男の存在がすごくリアルに画かれているんじゃないかと……。

つげ　…………。中年男にとって、やり

きれない感じがするんじゃないかと思うんですよね。
権藤　「懐しの」にしても「青岸」にしても、中年男は無表情なんですね。何を見ているのかよくわからない。いや、何を見ているのでもないし、何も見ていないのでもないかもしれない。でも、その無表情の下にかくされたというか、隠れてしまった心情は、よくわかるんです。
つげ　そういう人たちは、戦争を経験しているわけだけど、そういう人たちにとって戦争はどういうことなんだろう、どういうことだったんだろうと、疑問に思うんです。ぼくたちの年ぐらいじゃ終ったとしかわからないし。ぼくたちは、夜、防空壕の中から飛行機の火の玉が飛んでくるのを見てるだけだったから、それが戦争みたいで……。だけど、その人たちにとっては爆弾が落ちて、どうのこうのと。その頃のことを、もっと知りたいと思うんですね。

戦中派が気になる

権藤　なぜ、戦争が気になってしまうんでしょうね。ぼく自身にとってもだけど……。
つげ　なんででしょうね。やはり自分の知らないことが隠されているからでしょうかね。よく人の話にも、もう二度と戦争はしたくないとか、とにかくすごいもんだと聞かされるけれども、ただそれだけではわからないですよね。変にかんぐるのかもしれないけれど、何かもっと隠されているんではないかという気がするんですよ。
権藤　「懐しの」と「青岸」に登場する中年男は、ほとんど同じタイプで、というより共通の経験と心情をもった世代に見えるんですが、いわゆる戦中派に対するある確信みたいなものがありますか？
つげ　どうなんだろう。会社勤めしているときいろんな人を見てきたでしょ。マンガに画いたような話は出てこないんですけれども、そういう年輩の人たちを見ていて、その話しぶりや表情からは何を考えているのかわからないんです。もしこういう状態に置かれたら、こうなるんじゃないかって想像するんです。だから想像だけにおわってしまいますね。
権藤　実際、社会の表面だけ見ていたらこのような人が生きているようには見えないわけですよね。
つげ　そうですね。日常の生活なんていうものは、どうということはないですものね。しかし、平たくいって戦争に対する責任感みたいなものが戦争を体験した人たちにはあるんでしょうかね。
権藤　ぼくなんかの感じでは一握りだと思うんです。戦争責任みたいなものを感じて生きている人は、かなり無理して生きてるんじゃないかという気がするんです。「懐しの」や「青岸」に見られるように疲れ切って生きてるんじゃないかと。でもやはり少ないんじゃないでしょうか。精神的というか思想的というか苦々しい重みを背負って生きているそういう人たちは、日常生活の中では、敢えてそれを表に出すことをさけているんだろうという気がするんです。そして、多分、ぼくたちの見えないところで結局は消えていってしまうんでしょうね。
　つげさんの作品を見ながら、いわゆる戦中派の人たちの小説とか詩、例えば、梅崎春生とか鮎川信夫とかを思い浮かべざるを得なかったんですけどね。
つげ　やはり、自分たちのしてきた戦争を彼らは現在どう思っているのか、ということがどうしても気になりますね。「懐しのメロディ」を画いているときなどとくに感じたんだけど。
権藤　空白の中を絶望しながら、いや、絶望も出来ずに生きているんじゃないかとも思えるし……。
つげ　熱病みたいに戦争戦争で生きてきて、それが瞬間にパッと終っちゃって、そこからその人たちはどういう風に歩いているのか、すぐパッと切り変えられたのかどうかですね。現在は、何くわぬ顔をして生活しているけれど……。
権藤　いろいろな人がいたんでしょうけど、多くは見事に身変ったんでしょうね。十年以上ももっと前に、知識人の間で戦争責任論みたいなものがたたかわされたようなんですけれど、それすら大したものを生んでないですよね。当時、戦争体験を伝達しなくちゃいけないという戦中派知識人がいたし、また伝達しようとしなくたって伝達するもんだという人もいたんだけど、ぼくにとってはどうでもよかった。でも、ぼくは、つげさんの作品を見ながら、彼らがどういおうがいうまいが、伝達しちゃうものなんだとつくづく思ったんです。ぼくは、結果については絶望的だったので、作品を見て、とてもうれしいという以上に共感をおぼえたんですよ。
つげ　そのへんは伝わりますね。俺自身も不思議だな、と思いますね。
権藤　だいいちマンガでは、こういう内容のものは皆無だったでしょう。だから先ず驚きがあったし、うれしかったですね。梅崎春生の「幻化」とか椎名や島尾に見られる思想の重さみたいなものを感じてね。だけどつげさんは、梅崎や島尾たちのように戦中派ではないし、一体何がその核になっているんだろうと思ったりもしたんです。ぼくは、ぼくなりに、つげさんの心情みたいなものがわかるような気がするんですが……。
つげ　いろんな人を見てきたからでしょうね。そういう年輩の人たちが集まってお酒のんで最初は馬鹿話していて、最後は戦争の話に落ち着くんですよね。軍隊にいてどうとか、それがじめじめして話すわけでもなし、笑いながら楽しそうにしているんだけども、本当はどうなんだろうと思いますね。実際に楽しそうにしか話できないのかどうかなんて思うんです。たいてい暗い雰囲気なんかじゃないですよ。
権藤　ぼくのおやじなんかも、戦争の話になると元気になるんですね。ぼくはあまり聞いたことないけど、一生懸命話すらしい。すでに戦後二十四年経っているのに、おやじにとって二十四年はまるで無いみたいで、いまも〝大東亜戦争〟に生きているみたいなんです。一方では、戦争の悪口をいい、夢ではしょっ中うなされているらしいんですがね。それでも現在、戦争に支えられて生きているみたいに見えるんです。で、ぼくなんか空白の戦後、とくに敗戦直後、彼らがどうであったか知りたいんです。
つげ　何を考えて、どうやって生きていたのかしらね。ぼくなんかも食糧難で夜中買い出しに行ったのを憶えているけれど、やっぱりドタドタ食うために走りまわって生きていたみたいですね。
権藤　そして気が付いてみたら〝繁栄の社会〟だったなんてね。
つげ　そうなんですね。ところで、戦争を楽しそうに話しているかぎりで、すごくいい時代だったんでしょうか。つまり戦争さえなければ。
権藤　それはどうですかね。

つげ　今みたいになんでも合理的というもんじゃなくて、計算された生活でない、安っぽくいえば、人間的というのはどういうことなのかよくわからないけれど、そういうもの、気どりとかそんなものはなんにもない生活があったのかな。

権藤　おもしろいのは、島尾だったか梅崎だったか、多分両方ともだったと記憶しているんですが、軍隊にいたときが一番充実していた、というような意味のことをいっているんですね。充実していたという気持は、おぼろげには摑めるんですが、正直のところ理解しにくいですね。その充実感は、以前つまり戦争へ出征する前とくらべてどうなんだろうというところがまったくわからない。

つげ　第二次大戦以前のことをよく〃古き良き時代〃というけれども、どういうことをいうのかなあ。今とどういう風にちがうんでしょうね。

権藤　ぼくは同じなんだと思うんですよ。年をとると感覚や精神が鈍磨してそうなってしまうんではないかと。だから、あと二、三十年もすると、今が〃良き時代〃なんていわれかねないですね。

つげ　なにかゆとりみたいなものがあったのかなあなんて思うんですよ。昭和元禄といわれているけど、生活しにくいのかなあ……。

権藤　青岸良吉のような人は、〃古き良き時代〃とは思いもしないんじゃないかと思うな。〃古き良き時代〃と思う人たちと青岸良吉のような戦争を背負ってしまった人たちとの間には決定的な違いがあるんじゃないか、とね。

つげ　ええ、そういう風に思っていて欲しいという気があるんですね。何んでも楽しそうじゃなくて、〃古き良き時代〃ですませてしまわないで、たとえ一部でもいいから何か背中にしょってる人がいてもいいんじゃないかと思うんですけどもね。

権藤　傷夷軍人についてちょっと聞きたいんですけれども。これは唐突な質問ですか。

つげ　どういっていいかわからないけど、すごくいやな気分なんですね。なぜあそこにああして立っていなければならないかと思うんですよ。

権藤　池袋の地下道でよく見かけたんですけど、居ないとホッとするんですね。反面、居ないと、居て欲しかったという思いが出てくるんですよ。よくあんなニセモノは早く追放した方がいいという人がいるけど、そうかなあと思うんです。ニセモノだから追放したいんじゃなくて見たくないからなんだと思う。ということは戦争に対する痛みみたいなものをそれぞれがもっている証拠でしょう。

つげ　遠くから見ることはできるんだけれど、そばを通るときはまともに見ることできないですね。

権藤　傷夷軍人の場合とはちがいますけど、つげさんの作品見て、何を今さらとか、何を今ごろになって画く必要があるのかと思う人もいるんじゃないかと思う。逆に、今だからこそといういい方もできるはずで、ぼくは好みだけでいうんではなく、現在深い意味をもっていると思うんですね。

つげ　そうかもしれないですね。俺は画きたいし、今だから画くんでしょうね。

権藤　単に風景としての戦後に郷愁を感じているというのとは、大差があるはずですよね。ただ、ぼくも含めて敗戦直後のことばかりが思い出されてくるというのは、どういうことなのかなあ。つげさんは、それ以後のことはあまり気にならないですか？

つげ　ならないですね。戦後のバラックの店がたくさん並んでいた頃からあとは、スポッと抜けちゃうみたいですね。どこでどうして出てきたのかわからないけど。とにかく今、何を見ても何を聞いても感じないような感じなんです。

権藤　そのへんに戦中派との対話の……。

つげ　その人たちの心情の方が画き易いんですね。

意味のない会話を凝視める

権藤　つげさんのマンガ見ていて気になったのは、セリフに「……」の部分が多いことですね。セリフにも大分こだわっているようですが。

つげ　それはちょっと気をつかうんです。普通、話をしていてもすらすらいかないで、ポッポッと切れてしまうと思うんですよ。

権藤　絵だけではすまされない、セリフだけでも済まされない、それが「……」になってしまったように感じられるんです。「……」の中に表現しきれないものが凝縮されてしまっている、だからこの「……」にはより以上の意味が込められている感じをもったんです。

つげ　話をしていて、いったん途切れてそのあといいたいんだけれども、いえないというものがあるはずで……。一言いってとぎれて、またボソッといってとぎれて、というのが日常の会話ですよね。

権藤　本当にそうですね。一番いいたいところが言葉にならず、だから、その沈黙している部分に一番大切なものがあるかもしれないですね。政治的な思想とかイデオロギーとは関係なく、「……」には生きる思想みたいなものが象徴的に表わされていると思うんです。

つげ　画いていて、こういうことばを入れれば簡単に表現できると思うんだけれども、それが入らないで、他のことばを入れてしまい内に込めちゃうような感じにどうしてもなってしまうんです。

権藤　そういうのは、「ある影像」あたりにもありますね。内へ内へと込めてしまい、ある意味では、最も伝えにくいものになってしまっている。共通したこだわりをもってないとわかりにくいとも受けとられるでしょうね。セリフを追いかけているだけでは駄目なんで、セリフとセリフとの間の無音の声を読まなくちゃならないんですからね。少年と中年男の会話を読んでいてそれを感じますね。

つげ　本当は、お互いが何を話さなくてもいいんですけれども、マンガとして画く以上そうするしかないですからね。

権藤　少年のセリフによって中年男の心情がよく伝わってくるんです。そうすると、少年を出さないで画くということは不可能なことですね。

つげ　ええ。少年はすべてわかっているんです。中年男が次に何をしゃべるかということまで。そういう風に設定してあるから、冷たくいったり、先まわりしていったりするんですね。「懐しのメロディ」はかなり気を使ったんです。二人の感情がわかってもらえたらと思ったんですけど……。結局、一番目立たない平凡な生活をしている人たちは、当時のことを一番感じていると思うんですよ。一番戦争を体験しているから、逆にひっこんで生活しているんじゃないかと思うんです。

今月号の目安箱は休載いたします。

働くのはカッコ悪い

権藤　「青岸良吉の敗走」のあとが「昭和ご詠歌」でしたね。あの作品もすごく衝撃的だったんですけれども、くわしい話は他の機会にゆずるとして。ところで、今の若いマンガ家にしろ小説家にしろ、つげさんが画いているようなテーマに触れようとはしないでしょう。なぜ画かないのかなあと思うんですよね。今の新人にすれば、ならないですよね。不思議でならないですよね。不思議で

つげ　と思うんですね。そうかもしれないですね。いつまでもそんなことを、とね。

会社勤めしていたのは、やっぱりよかったですね。経験したものは画き易いですね。現在は、ガスの配達しているんですが、ボンベ一本百キロもあるんです。両手でかかえて持ち上げるんですけれど、聞いたとき百キロというのは重いんですけど、実際に持ったときの百キロというのはもっと重いですね。もうれつですね。そのもうれつだというのを感じたというのは、例えば紙に画く場合ちがってくるんですね。実際どこで重く感じるかということでちがってきますね。

本当におっかないですね。百キロおっことしたら足なんかつぶれてしまいますから。自動車から降ろすときゴロンとなるんですよ。それを身体で支えるんですけれども、こわいですね。

権藤　なるほどね。椎名の「永遠なる序章」という小説のなかで、鉛が入ったバケツをもつ手の重さは全体の重さを感じさせた、というような表現があって、鮮烈な印象を与えられたんですが、こうして実際に話を聞いていると、ものすごくリアルに感じられて……。仕事をしている間は何も考えないでしょうね。

つげ　考えることはなくなってしまいますね。何も考えなくなっちゃうんです。だから理屈なんかどうでもいいんです。自分がそんな感じだから、みんなも同じような気持だと思うんです。

仕事をするというのは、あまりカッコのいいものじゃない。カッコよく仕事するなんてことはないはずですよね。

権藤　生きてる人びとの見えないところ見えにくいところをさぐっていきたい、それをマンガで出していきたい、という想いが生まれてくるんでしょうね。

つげ　ええ、ただすいすいと生活している人たちとして見過ごしちゃっている部分ですね。

権藤　そこで単にストーリィ性のあるマンガとは違ってくると思うんです。もっと思想的というか、生き死にの思想というか、生活者のより深い内面を画く、ぼくにいわせると本当の劇画だという感じがする。つげ義春の真似にすぎないという人もいるけど、かなり異質だと思うんです。つげ義春氏からは、あのような内容のものはでてこないと思うんです。共通したものをもっているにしても、出てきかたがぜんぜんちがうでしょう。絵柄が多少は似ていることはあるけれども……。

つげ　兄貴と似ていることはたしかだけれど、自分ではちがったものを画いているつもりでいますね。俺のには、自然の描写は余りなくて、人間そのものの描写というのが一番ですね。じっくりやりますね。いろんな人間を見て画いていきたいと思うんです。

権藤　つげさんの登場人物の表情は本当にすごい。セリフ以上のことを表情が語っていってしまうから。それは、生きている人間のリアルさではなくて、つげ作品のリアルさだと思う。「捜索」では〃蒸発人間〃を画いていますが、あの男の表情、それは「懐しの」や「青岸」にも共通しているんだけど、が現在という情況を感じさせるんです。冒頭のストリップ劇場からはじまるところは、いいですね。

つげ　「青岸」画いていて、戦争と関係するものを止めようかな、と考えていたんですが、どこかでつながっているんですね。やっぱり離れられないような……。

権藤　その人たちに対する固着したイメージがあるんでしょうね。

つげ　そうでしょうね。どういう見方かわからないけれど、日常の会話を聞いていると、なんでもなくどうということはないんだけれども「やだなあ、やだなあ」という一人言みたいな言葉が聞えてくる。それにはべつに意味もないんでしょうけれど、すごく感じちゃって、みんなそう思って生きているんじゃないかと思ってしまうんです。「やだなあ」ということばがどこから出てくるのかなと考えると……。

権藤　ぼくなんか、つげさんがいつまでもそういうことにこだわりつづけて欲しいと思うんです。よく、こだわりすぎることは潔癖じゃないと悪くいわれるけどそのことが、無責任に戦争を続けさせ、無責任に戦後を転身させてしまったと思うんです。

露地裏をひやかすな

権藤　映画なんか見ますか？

つげ　この頃ほとんど見てないですね。小さいときはよく見ましたね。美空ひばりの「悲しき口笛」とか、週に二回ぐらい行ってましたよ。

権藤　「悲しき口笛」といえば、つげさんの作品の中には、「星の流れに」とか、「異国の丘」とか「上海帰りのリル」とか、当時の歌謡曲がでてくるんですが、当時子どもだった者の方が、その歌の情念みたいなものを内在させてしまっているような気がしたんです。ぼくなんかも、昭和二十七、八年以後の歌はあまり記憶にないんです。「上海帰りのリル」あたりで、戦後の歌は終ってしまったような気がするんです。

つげ　やっぱり同じですね。春日八郎がでて、三橋美智也、三波春夫とでてくる頃からは、わからないですね。どうでもいいような気がして。

権藤　テレビなんかで〃懐しのメロディ〃なんてやるでしょう。関係ないんですよね。豪華なステージの上でそんな歌を歌われると、違うんだという思いがしてきてしまって、腹立たしいんです。つげさんの「懐しのメロディ」とは無縁だなという感じですね。「上海帰りのリル」なんか歌われると、そんな歌じゃねえ、といいたくなるんです。昔、そう歌われたんじゃないというのではなくて、今、そう歌うもんじゃねえという思いなんですが……。

つげ　現在、同じ世代の人たちを見て、どんなことを考えて生活しているのか、知りたいとも思わないし、話し合ったこともないですね。ふだん目につくのは派手な服装してチャラチャラして歩いているとか、デモだのなんだのとワーワー騒いでいますけれどもね。新聞読んでも、テレビのニュース見ても何も感じないで

すね。正直いって感じないんだなあ……。べつに声を大にしていうわけではないけれど、これは勤めてきたせいだと思うんですね。

権藤　ぼくなんか、無秩序と混乱の殺ばつとした時代に「星の流れに」なんかが出てきたんで、平和そうに歌うものじゃないと思うんです。現在が平和だとか泰平だとかぜんぜん思わないけれど、本当は、まだ戦後が終っていないはずだという感じがしてね。

つげ　俺には、一般社会のことなんかわからないからどうでもいいんでしょうね。とにかくわからないことの方が多いから。

　勤めていた所で働いている人達のことはよくわかるんです。だまっていてもわかるんです。そういう俺が勤めていた工場の人の日常の会話には興味があるんです。会話のおもしろさですね。

権藤　「ゴッホ」の作品にも組合大会のことなんかでていましたね。

つげ　実際にああなんですよ。組合大会やっても、新聞読んだり、まるっきり関係ない話をしている。終ればパチパチと拍手するんです。とにかく話なんかわかんないですよ。委員長や議長が一生懸命話していても、ブツブツ、ゴチャゴチャいっていて、何か意見出して下さいといわれるとだまっちゃってね。関心があるのは一部の者だけですね。どうでもいいから早く終らせろとか、最後はぶっつぶれちゃえばいいんだっていうんです。結局、毎日不満だらけだけども、それをポンポン表に出して、いつのまにか馬鹿話に移っていってしまうんです。

権藤　そのへんを読者にわかって欲しいと思いますか？

つげ　画いていてわかって欲しいとは意識していないですね。多分わからないと思うんですよ。人間なんて会話していても何もわからないんだと思いますね。それでいいんだと思っていますから。

すれちがう生活

権藤　つげさんの作品見ていて、つきつめていくと、画かなくてもいいんじゃないかという気もしてくるんです。いや、見るぼく自身が考え込む必要はないんじゃないかもしれないと。しかし、画かれているからこそ、そういう自問自答せざるを得ないわけなんですが。

つげ　こういう露地裏の生活とはまったく逆な生活もあるはずなんですよね。露地裏の会話というのは、余りなかったんじゃないかと思うんです。露地裏の会話というのは、くだらねえととられるし、何の意味もねえじゃねえか、といわれるんだけど、俺はそうじゃないと思う。

権藤　つまりそこで見方の問題にかかわってくるわけでしょう。くだらねえといういい方と、そうじゃないといういい方と。

つげ　露地裏の会話の中にはにじみ出てくる何かがあるけど、逆のいい方する人にはわからないと思うんですね。

権藤　露地裏の会話にこめられた実在感みたいなもの……。

つげ　ええ、その人たちは意識しないで自然にことばにして出してしまうわけでしょう。多少物事を意識してしまう人は理屈づけでことばをはくけど、意識しないで出てくることばの重みですね。だからこそこわいんじゃないでしょうか。

権藤　一般的にそういう会話に対して、単純じゃねえか、といういい方があるけども、まったく逆だと思いますね。そこでは生きること自体が複雑で、複雑さのつみ重ねの上に生活がある、そして、それは複雑なことばとしては出てきようがないと思うんです。むしろ、複雑化されたことばの中味こそ、単純なものでうめつくされているんじゃないですかね。

つげ　ええ、ええ、そうですね。

権藤　単純なことばの中には複雑すぎて単純化せざるを得ない痛苦が隠されているのかもしれないと思うんです。そういうのを表現する場合、小説よりマンガ、ことに劇画の場合画き易いんじゃないですか？

つげ　そりゃあそうですね。絵がつきますからある程度まで表現できますね。

権藤　つげ義春氏と鈴木志郎康さんとの対談で、義春氏が「柳田国男の実存的センスで接近することかしら」といっていましたけど、すごくうまいいい方だと思ったんですよ。

　ところで、義春氏の作品についてはどうですか？

つげ　兄貴のはよく見るし、「ゲンセンカン主人」が一番よかったですね。その次は「ほんやら洞のべんさん」、最近、「峠の犬」を読み返して、いいなあと思ったんです。最後のところで行商人が、「帰らなくちゃならない理由はなんにもないのだが」というのがすごくわかるんですよ。

権藤　「沼」や最近評判の「ねじ式」はどうですか？

つげ　「沼」はどうしても駄目ですね。「峠の犬」とか「べんさん」のようにぴったり入ってこないんです。全体としてすごくかたい印象を受けたんです。「ねじ式」は、とてもわからなかったですね。画く人の感情の盛り上がりがボコンボコンと並べるよりしょうがなくなってしまったんじゃないでしょうかね。

権藤　そうだと思いますね。いま「ねじ式」を絶賛することが流行になってしまって、風俗的なモダニストたちが色々とことばをあやつって論じていますけれど彼らにとっては一時的な流行性の興奮なんでしょうね。「柳田国男の実存的センス」の意味なんか捉えていないでしょうし、彼らにとってそうした〃生活〃なんか関係ないでしょうからね。

つげ　ええ。

権藤　ぼくは、土着だとか、向う側とか、彼岸とか、抜け落ちちゃったとか、そんなことはどうでもいいんじゃないかという気がするんです。

つげ・じっさい露地裏をひやかしたり茶化したりするのはいやですね。裏街の会話には、痛みを深く意識していないけれども……。

権藤　山の手だろうが下町だろうが、結局は同じだと思うんです。区別なんかする必要はない。人間存在とはそんな区別で計れるもんじゃない。で、ぼくはもしそういういい方をあえてするなら、すべてが露地裏だと思ってるんです。

つげ　めちゃくちゃになりながら生きているという感じですよね。そうしたものを、俺なりに画いて、「なんだ、これ」といわれてもしょうがない。だからわかれといっても無理で、こちらがわかれといっているわけでもないんですからね。

　表面だけ見ていって、フーンこんなのもあるんだな、という見方だけでいいんですよ。この人はこんな生活しているんだな、と深い意味をとらえるんではなくてパラパラとめくっていってね。

　表面をサッと素通りしていく見方でいいと思うんです。ふだんの生活って、だれでもそうだと思うんですね。ただすれちがっていくだけの生活ですよね。

（終）

新日本書紀は佐々木守先生のご都合で今月号は休載させていただきます　**編集部**

新人作家募集!

応募作品のきまり

① 作品の独創性を第一とする。
② テーマ、モチーフ、構成自由。
③ 枚数はなるべく20枚以内。
④ B4判位の用紙に、必ず、タテ27.3cm ヨコ18.2cmに書くこと。コマ取り自由。
⑤ 墨汁または製図用黒インクを使用し、ウス墨や黒以外の色はつけない。
⑥ セリフやナレーションの文字は、鉛筆で正しく読みやすく書くこと。
⑦ 締切日は設けず、到着次第「ガロ」編集部において審査する。
⑧ 入選作品は「ガロ」誌上に掲載し、原稿料を支払う。
⑨ 返送用切手同封の作品は返却する。
⑩ 作品送り先＝**東京都神田神保町1－55**
株式会社 **青林堂**「ガロ」編集部